

環太平洋大学ニュージーランド校・日本研究学科における 語学交換プログラムの事例研究¹⁾

The effectiveness of the Language Exchange Session on Students Studying
Japanese as a Foreign language at University Level in New Zealand

山本 純子
YAMAMOTO, Junko
IPU New Zealand
School of Language and Culture ·
Japanese Studies

滝 麻衣
TAKI, Mai
IPU New Zealand
School of Language and Culture ·
Japanese Studies

スティーブン オーコナー
Stephen O'CONNOR
IPU New Zealand
Bachelor of Contemporary International Studies ·
TESOL & Language Studies Major

要約：ニュージーランド国内の高等教育機関である本校において、日本研究学科は、2020年夏学期中に日本語と英語をそれぞれ母国語とする学生を募り語学交換プログラム、つまりバディ・セッション²⁾を開講した。「バディ」が活用された制度は、留学生との語学交換や異文化交流を目的に、ニュージーランド教育省の管轄である8つの国立大学全てで実施されていることから、ヨーロッパで始まったとされるこの制度はニュージーランド全土に浸透している。イギリス教育の先駆者の1人であったGeoff (2009)³⁾は「バディ」グループを作って学習することの重要性を唱えている。今回のバディ・セッション開講の目的は、各学生が語学力向上を目指すこと、語学学習に対するモチベーション維持及び向上に繋げること、さらに、日本人留学生が多い本校の特性を生かし、彼らとの交流を図り、英語を母国語とするニュージーランド人学生や留学生の日本語が上達するための要因を探究することを研究課題とした。本稿の目的は、アンケートの内容を基に、バディ・セッションに参加することは学習者の語学力上達に繋がっているのか、彼らのモチベーション維持・向上への有効性を考察することである。

キーワード：語学交換プログラムの効果、バディ・セッション、日本語学習、モチベーション

Abstract : The exchange program for the language and culture what is called “Buddy session” was carried out during the summer term in 2020 within The Japanese Studies Faculty at IPU New Zealand.

It was carried out as a one-on-one session with a second language learner of Japanese and a native Japanese speaker, thus, the session was a cooperative practice of pairing Japanese and English speaking students for mutual assistance with each language.

The word ‘buddy’ is frequently defined as the term of “friend” “mate” “colleague” and “work mate”, but there is not a precise definition of the practice. This system of buddy for the educational purpose is introduced from Europe countries, and this academic system has become well established throughout New Zealand, as all eight national universities and other educational institutions are familiar with it.

The objective of this study was to understand the effectiveness of the Language Exchange Support Program and how it affects students’ Japanese language study as a foreign language at

tertiary level in New Zealand. Also, the aim was to understand students' needs from their own point of view, and significantly, evaluate the quality of the program. From the results, it can be assumed that the Language Exchange Support Program provided the learning support outside the class and enabled students the opportunity to develop their language proficiency, also, it potentially satisfied their needs for their further language study.

Keywords : Effectiveness of the Language Exchange Support Program, Buddy Session, Japanese Language Studies, Motivation

1. 序章

バディ・システムは、語学交換や異文化交流を目的に、ニュージーランド教育省の管轄である国立大学全てがその制度を設けていることから、イギリスとの歴史的な教育上の流れを引き継いだアカデミック・カルチャーであると言えるのではないだろうか。イギリス教育の先駆者の1人であるGeoff (2009)⁴⁾は「バディ」グループを作って学習することの重要性を唱えている。そして、ニュージーランドの教育内容は未来教育指数⁵⁾が高いことで世界的に評価されている。2017年には、テクノロジーの急激な発展とグローバル化に対応できる新しい教育に挑戦、創造し続けているとして、対人関係への適応能力、問題解決能力や危機管理能力を身に付けることができる教育を実施していることが評価され世界第一位に選ばれた。小学校ではコンピューターを使用した自主的探究を促すカリキュラムが組まれており、バディと協働学習するチームワークを基準とした共同学習が主流である能動的学習を採用している。そのような教育環境の中で、本学でバディ・セッションを始めるきっかけとなったのは、クリスマス時期から4月中旬までは日本語の正規の授業が開講されないことから、学習者の日本語離れを防ぐためであった。そしてニュージーランド人学生と日本人学生の文化的交流ばかりではなく、語学学習の面からも互いの目標言語を使用した交流を増やすために開催に至ったのである。バディ・セッションを行う上で、学生が主体性を持って意見を発信すること、また目標言語の発言内容に関して、それぞれの母語話者からのフィードバックを得るようにした。教員からもフォローアップを加えることにより、バディ・セッションへの効果や語学学習に対してのモチベーションの維持や向上に期待した。また初対面同士の学生が多かったため、会話が持続するよう、毎回教員からいくつかのトピックを与えた。それらをバディ・セッションで実践したことの効果を測るために、ヨーロッパ言語共有参照枠 (CEFR)⁶⁾内のA1, A2, B1, B2,

C1, C2のレベル段階別に区別された、具体的に何ができるかという「can-do リスト」と比較した自身の日本語レベルの記入を、事前・事後に実施したアンケートに加えて依頼した。

2. 先行研究

日本では聞き慣れないバディ・スタディとは、またの名をコラボレーション・スタディともいう。お互いの不足分野を補うという目的でペアを組み、相互効果を見込んだ学習スタイルのことを指す。上述通り、バディとは「同志」「仲間」や「協力者」のことを指し、「友達」という意味よりも目標に向かって協働する仲間という意味合いが強い。Bush, G. (1998)⁷⁾は、構成主義、社会的学習、専門の発展といったことから不可欠な部分として、教育現場における教育者同士の協同作業の必要性を述べている。したがって、先輩・後輩といった年齢差による区別ではなく、支え合う、力を出し合うといった相互扶助の精神に則った学習スタイルだといえる。ニュージーランドでは、小学校から大学までバディ・システムが浸透しており、首都ウエリントン国立ビクトリア大学では、“International Buddy Programme”⁸⁾という制度を毎年大勢の新入学生に紹介して、海外留学生・交換留学生・ESL⁹⁾(English as a Second Language)の学生・学部生や院生といった幅広い層の学生間で語学学習や異文化交流として知られている。元来バディ・スタディは教えることと、学ぶことの両方を実践できる協業であり、相互扶助プログラムとして多くの教育関係者から注目を集めている。Abdul, Naser and Rattana (2010)は、バディ・サポート・システムとは教育者の間でモチベーションの維持や高まりのために学習の過程に組み込んだサポート・プログラムだと述べている。また、使用言語が異なる学習者同士が言語学習を通じて異文化経験を積むこともできる。フランスを拠点とするESN France-Erasmus Student Network¹⁰⁾は、ヨーロッパ各地にそのネットワークを広げており、地元の

学生と留学生をバディ・システムで繋げることによって国際交流を通じて、お互いの関係性を発展させる絶好の機会になっているという。学習者が自ら思考して発言しないと成り立たない自主参加型学習スタイルなので、能動的であり協働的に学ぶことができるため、語学学習に適していると言える。久次（2018）が、ピア・ラーニングを「言葉を媒介として、学習者が協力して学習課題を遂行」していく学びの方法であると定義しているが、本稿ではニュージーランドのカルチャーを尊び、「同志」「仲間」や「協力者」という意味である「バディ」を使用して研究分析を進める。

3. バディ・セッションの目的と構成

3-1. 目的

バディ・セッション開催の目的は、本学学生の語学力上達に繋がっているのか、彼らのモチベーション維持または向上に役立っているのか、その結果を考察することである。そして、バディ・セッションに参加することによって語学力が向上することや、日本とニュージーランドという全く異なる文化で育った学習者同士が交流することで語学を通じた異文化理解に繋がることもバディ・セッション参加の利点として挙げておきたい。さらに、参加する事前に内容の下調べをしておくことで、広い学識の取得の可能性が広がることも予想できる。本稿では、バディ・セッションを通じて、国際交流や寛容性を備えた人間性の汎用の育成に繋げることができれば、学生に国際性が身に付くだろうことを想定した願いも含まれることが、今後の研究における目的として考慮される。

3-2. 構成

バディ・セッションの開催日時、場所、流れは以下

表1. セッションの構成

期間	2020年2月20日～3月12日（計7回）
日時	毎週月曜日と木曜日4時半～5時45分
場所	本学の図書館にある自習室
話題	自由選択
形式	日本語学習者1名対日本人学生1～2名
セッションの流れ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 毎回ペアまたはグループを指定 2. 日本語での会話（30分） 3. 日本人学生から日本語学習者へのフィードバック 4. 英語での会話（30分） 5. 日本語学習者から日本人学生へのフィードバック

の表の通りである。

話題として学生同士が自主的に興味を持っているものを話せるように設定をした。しかし、会話が途中で終了してしまい、話題に困ることが危惧されたため、教員が事前に趣味や方言、伝統的な行事等のトピックを20個ほど準備しておき、参加学生に提示した。学生自身が主体となり積極的に会話に参加できることを前提として、融通の利く話題選定ができるよう配慮した。セッションの目的は日本語力および英語力の向上であるため、所定の時間内はどちらか一方のみの言語を話すこととし、各セッション後には、お互いの日本語や英語についてネイティブの視点からフィードバックする時間を設け、語学力向上の助けになるように流れを設計した。

4. 学習者の背景と調査方法

4-1. 参加学生の背景と日本語学習歴

本研究の参加学生は、ニュージーランドの高等教育機関で日本語初級者から上級まで修了した者を含めるニュージーランド人とベトナムから来た留学生の計5人である。全員が現代国際学部にも所属しているが、専攻は日本語以外の者もあり、全員英語はネイティブレベルである。以下、学習者の背景と日本語学習歴の一覧である。

4-2. 調査方法

プログラム開始前と修了後の2回、アンケート調査を実施し、その回答内容を基に語学力上達やモチベーションの維持・向上に関して、どのように効果が得られたかを考察する。学習者の日本語能力に差が見られたため、質問も回答も全て英語で行った。

表2. 学習者の背景

	S1 ⁽¹⁾	S2	S3	S4	S5
国籍	ベトナム	ニュージーランド	ニュージーランド	ベトナム	ニュージーランド
性別	女	男	男	女	女
学年	3	2	2	3	2
専攻	国際関係学科	TESOL言語教育学科	TESOL言語教育学科	日本研究学科	国際関係学科
学習年数	7	6-7	2	4	6
JLPT有無	2級	無し	無し	5級	無し
1日平均勉強時間	30分 -1時間	30分以下	1-2時間	30分以下	30分以下

5. アンケートの結果

5-1. 事前アンケート

バディ・セッション開始前に実施したアンケートは以下5点である。

- 現在の日本語力
- モチベーション維持のために取り組んでいること
- 日本語能力（特にスピーキングとリスニング力）
- クラス外での日本語の使用
- バディ・セッションへの期待

日本語能力の指標としたのは、1. で上述した通りJLPTの取得級及びCEFRを用いた自己評価である。各習得レベルを「A：基礎段階」「B：自立段階」「C：熟達段階」に分けた上で、さらに2段階ずつに分け6段階に分類している。通常、CEFRでは4技能を測るために使用されるが、本研究はスピーキングとリスニングに焦点を置いているため、学習者にもこの2技能についてのみ回答を依頼した。以下、CEFR指標と学習者の回答である。

学習歴と自己評価内容を比較すると、6年間勉強している学習者S2及び4年間のS4に関しては、自分の日本語能力に対する自信の無さが推測される。自由回答の項目においては、日本語力に自信がなく、日本人学生とコミュニケーションをとることに難しさを感じていると述べている。また、S1以外の学習者は自身の一番の問題点及び日常的に使用していない技能として、スピーキングを挙げている。さらに、バディ・セッションに期待する点として、自信の構築または向上、スピーキング及びリスニング力の向上について全員が回答している。その他コメントには、新たに日本人学生と友達になることが挙げられている。また、バ

ディ・セッションを行った2～3月は正規の日本語クラスが開講されていない。そのため、1日の日本語学習時間も平均30分～1時間程度に短くなるという問題を少しでも解消するためにも、バディ・セッションを行うことは有意義であると考えられる。

5-2. 事後アンケート

以下は、全7回のバディ・セッションが修了した際に実施した、日本語力の変化及びセッションの満足度に関する調査結果である。

日本語力に関しては、3名の学習者がスピーキングよりもリスニングの方が伸びたと回答している。理由としては、バディが話している内容を理解することや使用されている文型に集中できたためと挙げられている。一方でスピーキングについては、「自分の考えを日本語にできるほどの語彙がない」というコメントが挙げられた。学習者S4に限っては、日本語で話すことに対して自信がついたと述べている。また、セッション内容が実施前の期待に応じていたかどうかという点については、5段階評価法を採用し「1. 全くそうではない」「2. そうではない」「3. どちらでもない」「4. ややあてはまる」「5. 大変あてはまる」という5段階別の自己評価による回答を得た。5名中3名の学習者がCEFRの基準において、事前アンケート時よりも1ランク高く自己評価をしている。そして「バディからたくさんのことを学べた」「トピックが提示されていたため、多くのことについて話すことができた」などのフィードバックが挙げられた。「3. どちらでもない」を選択した学生のコメントは、自分自身のスケジュール調整がうまくいかず、毎回セッションに参加することが難しかったと回答であった。また、モチベーションが向上したかどうかについても5

表3. CEFRの熟達度¹²⁾

		A2	B1	C1
理解すること	聞くこと	(ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、近所、仕事などの) 直接自分につながりのある領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。短く、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞き取れる。	仕事、学校、娯楽で普段出合うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。話し方が比較的ゆっくり、はっきりとしているなら、時事問題や、個人的もしくは仕事上の話題についても、ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。	たとえ構成がはっきりしなくて、関係性が暗示されているにすぎず、明示的でない場合でも、長い話が理解できる。特別の努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。
	話すこと	単純な日常の仕事の中で、情報の直接のやり取りが必要ならば、身近な話題や活動について話し合いができる。通常は会話を続けていくだけの理解力はないのだが、短い社交的なやり取りをすることはできる。	当該言語圏の旅行中に最も起こりやすいたいいていの状況に対処することができる。例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話に入ることができる。	言葉をことさら探さずに流暢に自然に自己表現ができる。社会上、仕事上の目的に合った言葉遣いが、意のままに効果的にできる。自分の考えや意見を正確に表現でき、自分の発言を上手に他の話し手の発言にあわせることができる。
	表現	家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴を簡単なことばで一連の語句や文を使って説明できる。	簡単な方法で語句をつないで、自分の経験や出来事、夢や希望、野心を語るすることができる。意見や計画に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。物語を語ったり、本や映画のあらすじを話し、またそれに対する感想・考えを表現できる。	複雑な話題を、派生的話題にも立ち入って、詳しく論ずることができ、一定の観点を展開しながら、適切な結論でまとめ上げることができる。

表4. 学習者自身の日本語能力に対する自己評価

	S1	S2	S3	S4	S5
聞くこと	C1	B1	回答無し	A2	回答無し
やりとり	B1	B1		A2	
表現	B1	B1		A2	

表5. 学習者自身の日本語能力に対する自己評価

	S1	S2	S3	S4	S5
聞くこと	C1	B1	回答無し	A2	A2
やりとり	B2	B1		B1	A1
表現	B2	B1		B1	A1

段階評価を行ったが、5名中1名のみ「4. やや向上した」、3名が「3. どちらでもない」という自己評価結果となり、内1名は無回答であった。理由として、バディである日本人学生の英語力と自分自身の日

本語力を無意識に比較してしまったり、日本語でコミュニケーションを取ることに自信の無さが挙げられていた。

6. 考察

夏期間限定の短期開催という点で限界はあったものの、事後アンケートの結果を分析すると、ボディ・セッションで日本語を話す・聞く機会を設けたことによって、学習効果があったと考えることができるのではないだろうか。研究対象者の数が少ないため、実際には応用分析を加えた上で検証しなければならないことを前提にしているが、学習者が自身の日本語能力を肯定的に評価しているということは、ボディ・セッションの学習効果の1つとして解釈できる。具体的には、「日本語能力に関する質問 (Japanese-language proficiency)」の項目内にある「1. このボディ・セッションを通じて話す・聞く力が上達したと思えますか」「3. 特に話す・聞く、どちらの力が伸びたと感じますか」「4. 3に関してそう答えた理由は何ですか」という質問に関して、半数以上が「話す」より「聞く」方が伸びたと感じると答えている。Krashen (1982)¹³⁾ はインプット仮説を唱え、言語習得のために、十分なインプットを与えることが必要であると述べている。インプットとは「読む」「聞く」を指し、十分なインプットを与えられた場合、後に自然なアウトプットが引き出されるというナチュラル・アプローチの理論に到達した。また、原 (2010)¹⁴⁾ はクラッシュェンの教授法を基に第二言語を使って文化や科学などの意味のある内容を理解可能な範囲で教えることによって第二言語を自然習得する方法を提唱している。つまり、実施期間の短いセッションであったが、何らかの習得や満足を認める学習者がいたということが、セッションの効果があったことを示す結果となっている

る。日本語を学ぶことで、将来は日本で働きながら暮らす、趣味の範囲で学習を楽しむといった目的を持ってセッションに参加した意義があったということを示唆しているのではないだろうか。また、モチベーションを高めるプロセスについて、田中 (2014) は「学習内容の価値の内在化によって、学習者は学習事項を積極的に使おうと努力し、それが学習項目の習得へと繋がり、その結果、語学力の向上を自覚する」というメカニズムを下記のように説明している。

つまり、ボディ・セッションの参加者は有能性の欲求¹⁶⁾ に対応していたため、モチベーションが上がったと考えられ、このボディ・セッションを開催した意義があったと言えるのではないだろうか。下記の図と学生からのフィードバックを比較すると、学習者のモチベーションを向上させることが出来たと言えるのではないだろうか。大学学内の寮に多くの日本人学生が暮らしているため、日本語学習者は日頃から、日本語の価値の内在化¹⁷⁾ を必要としている。しかし、彼らが毎日日本語のみで話したり、聞いたりしているかという、そうとは言い切れない。実際に、学習者からは日本人学生と話しているときは英語をよく使うと聞くことがある。これは、日本人学生は英語を勉強しており、積極的に英語で話しかけてくるからである。今回、ボディセッションを実施したことにより、一定の時間、日本語のみでコミュニケーションを取らなければならない状況を演出することが可能になった。また、言語習得に関しても、事後アンケートの結果からも肯定的な回答があり、学生自身も少なからず何かしらの上達を実感していると言える。その一方で、ある学生は自信の欠落について回答しており、苦手意識の

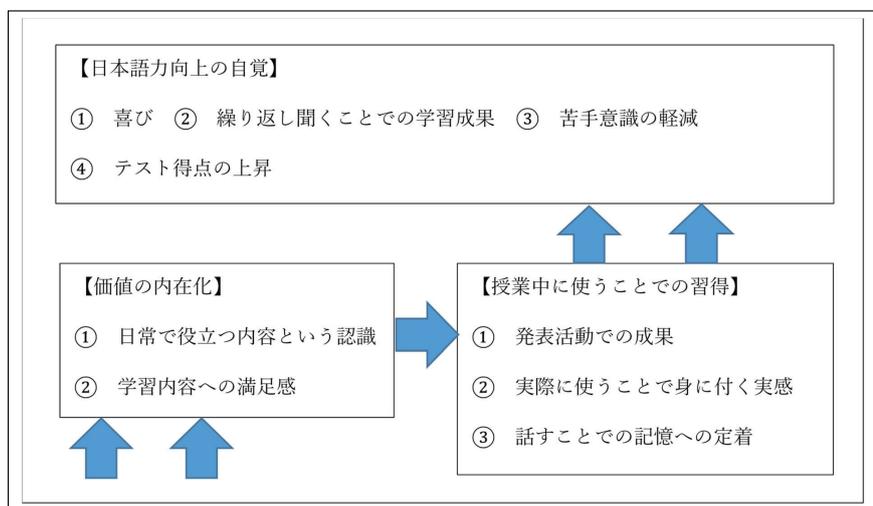


図1. 特性レベルの内発的動機づけ¹⁵⁾

軽減には直接的な効果が得られなかったため、改善が必要であるといえる。

7. セッション実施後の問題提起と改善点

セッションに対する主な問題点として以下の3点が挙げられる。

1. 欠席に伴うグループ変更
2. リーダーシップの欠如
3. 言語力不足

まず、日本語の授業がない夏学期に日本語を忘れないように、または学期中に学習した日本語を維持するためにバディ・セッションが実施されたが、参加希望者全員が揃うことは少なかった。その原因として、セッションの実施日時として平日の夕方に設定して行ったが、放課後はアルバイトをしている学生にとっては、参加可能な時間帯ではなかった。それにより、全7回中半分も出席できなかった学生がいた。また、授業のように単位化されていない課外活動であったため、学習意欲があっても気が緩んでしまうなどの理由で出席せず、頻繁なグループ替えをすることになった。それにより、本来であれば1対1のセッションのはずが、3名のグループで行う結果となった。さらに、日本人学生の中からリーダーを1名選び運営補助を期待していたが、1年生で英語力に自信がなく、参加者全員とうまくコミュニケーションが取れていなかった可能性もある。そして、個々の学生に明確な責任を負わせておらず、リーダーシップの執れる学生が見当たらなかったことから、教員が主導となりセッションを開催していた。つまり、学生自身の発信力や傾聴力といったコミュニケーション力と主体性や自覚が不足していたために、セッションを円滑に進められなかったことが問題であった。改善策として、学生同士でセッションを醸成できるための仕組み作りや、学生自身が主体的な行動をとらなければセッション開催の意味がなくなってしまうことを自覚することが挙げられる。言語的な問題点として、学習者の語彙力不足である。トピックは事前に教員が準備していたが、そのトピックに関連する語彙も用意しておくべきであった。実際に、事後アンケートによると、語彙力不足のために自信がなくて話せなかった、と感想を述べている学習者がいた。そのため、来年度以降に実施する場合には、トピックに関連した語彙や文法等も一覧化し、参加学習者がより話しやすいように運営方法を改める必要があるだろう。

8. 結論

2020年2月から3月に実施された全7回のバディ・セッションから、そのモチベーションを維持及び向上することに対しての有効性が、セッション終了後に実施したアンケートの内容から、何らかの習得や満足を認める学習者がいたということから、セッションの効果があったということが検証された。バディ・セッションに参加する目的の1つである語学力上達への期待という点に関しては、モチベーションの維持が可能であると予測できることから、相乗効果として語学力上達への期待に応じられることが考えられる。事後アンケートの結果によると、セッションを通じて話すこと・聞くことが上達したと感じる学生が5名中1名存在したという事例からその効果が認められたといえる。上達したとは言えないと回答した学生は「話すこと・聞くことの両方が上達したわけではなく、聞くことのみ上達した」「話すための語彙が足りないが、聞くことは問題がない」とその理由を挙げている。つまり、このセッションが全く期待に沿わなかったわけではなく、何らかの形で効果があったということを示唆している。モチベーションの維持及び向上に繋がると思うかどうかという質問について、事前アンケートの結果は5名中3名が「そう思う」と回答し、他2名は「まあまあ繋がると思う」「少し」と回答している。事後アンケートでは、1から5までのスコア値による評価スケールとコメントを依頼した結果、1名が満足、3名がどちらでもない、1名が該当なしという集計結果となった。満足していると回答した学生は「以前よりコミュニケーションが取れるようになった」と答え、どちらでもないと回答した学生は「セッションに自己都合で参加できなかった」「自分の日本語レベルを他参加学生と比較すると低く感じたが、今後も頑張って勉強します」とコメントを残している。回答されたコメントからモチベーションを可視化することに限界があり、主観によるとモチベーションは上がっていないと捉えていても、客観的に見た場合、モチベーションの維持には繋がっていることが伺える。上述のBush, G. (2003) は、教育者同士の共同研究専門的な教育の経験値を積むことは最終的にプロセスを含むゴールに繋がり、その経験が共有できるということを確認している、と述べている。このことを学生に置き換えると、今回実施したセッションのような経験値を多く積んでいくことが、最終的に語学力上達というゴールに繋がっていき、将来的に、それらの経験を教

員や他学生と共有できると考えられる。

9. 今後の展望

本稿の結果から得られたバディ・セッションの反省点を改善し、引き続きセッションを開催することで学生の日本語能力の維持・向上に繋げていくことが可能であると考えられる。また、世界各国に本学校法人が存在するという利点を活かして、システムのクラウド化を図れば、そのプラットフォームに対応したバディ・システムのネットワークを構築することによって場所を選ばず経費も削減できる学生サービスが実現できると考えられる。現在、世界中を震撼させている新型コロナウイルスによる脅威に晒されることなく、AI時代を生き抜いていく学生達へ、授業だけではなく、課外活動として本稿で取り扱ったバディ・セッションを通じて、創造力や倫理的な思考力、コミュニケーション力が培われることを願うばかりである。

【参考文献・参考サイト】

- 奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子 (2016) 「日本語教師のためのCEFR」くろしお出版, 1-189
- 田中博晃 (2014) 「特性レベルの内発的動機づけを高める授業と有能性の欲求」『JALT Journal』36 (1), 91-114, 図1はp114から部分抜粋
- 原やす江 (2010) 「言語力をどのように育成するか - 第二言語教育の観点とその学校教育環境への「翻訳」-」『城西国際大学紀要』19 (1), 81-105
- 久次優子 (2018) 「ピア・リーディングにおける知識の相互行為的達成 クリティカル・リーディング力育成を目指した活動の会話分析」『言語文化教育研究』16, 177-197
- 藤田裕子 (2014) 「学習者の内発的動機づけを高める授業実践の効果」『Obirin Today』15, 73-88
- British Council Homepage <<https://www.britishcouncil.org/education>> (2020年7月8日)
- Bush, G. (2003). The School Buddy System: The practice of Collaboration. 10, 93, 94
Chicago: ALA Editions of the American Library Association
<<https://epdf.pub/the-school-buddy-system-the-practice-of-collaboration.html>> (2020年8月20日)
- CEFR 『共通参照レベル』JF 日本語教育スタンダード, 新版より自己評価表を抜粋
<https://jfstandard.jp/pdf/web_reference.pdf> (2020年8月20日)
- Dr. Abdul, G. and others (2010). The Effectiveness of Buddy Support System Implementation among Science Teachers: The Case of Malaysia. Malaysia: Asian Social Science. 6(4), 123
EDUCATION.govt.nz <<https://www.education.govt.nz/>> (2020年7月8日)
- ESN France, Erasmus Student Network
<<https://buddysystem.eu/en/the-project>> (2020年8月2日)
- Geoff Petty Homepage <<http://geoffpetty.com/>> (2020年7月2日)
- Krashen, S. (1980) The input hypotheses. In J. Alatis (Ed.), Current Issues in Bilingual Education. Washington, DC: Georgetown University Press
- Krashen S. (1982) Principles and Practice Second Language Acquisition. University of Southern California, Oxford: Pergamon Press
- The Economist, The Worldwide Education for the Future Index 2017
<https://educatingforthefuture.economist.com/the-worldwide-educating-for-the-future-index-2017/> (2020年7月8日)
- Victoria University of Wellington
<https://www.wgtn.ac.nz/students/get-involved/international/buddy/guide-to-being-a-buddy.pdf> (2020年8月20日)

¹⁾ 本稿は、『紀要』17号掲載 'The effectiveness of the Language Exchange Session on Students Studying Japanese as a Foreign language at University Level in New Zealand' の翻訳版である

²⁾ 本稿では、語学交換の場として開催された有志学生の集まりを「バディ・セッション」と呼称する。「バディ」とは「仲間」を意味し、バディ・システムはニュージーランドの各学校で仲間同士が相互協力するという目的で浸透している

³⁾ Resources provided on Geoff Petty Homepage. Geoff Petty is one of Britain's leading experts on teaching methods. He mentioned "Enjoy experimenting with these methods but don't expect to use them perfectly straight away."

⁴⁾ イギリス教育を先導し、実践的な教育法の重要性を唱えている

⁵⁾ 未来教育指数の指標算出のために、その教育制度

が「将来志向の技術」を有している分野が評価された

- 6) CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessmentの略称)は、英国公的機関であるブリティッシュ・カウンシルによって開発された外国語の学習や評価のためにヨーロッパ言語共通参照枠を意味し、外国語の運用能力を段階別の基準が測定できる。また、言語教育に関わる人(教師・学習者・教育行政関係者など)すべての人が言語学習・言語教育などに関して参照するためのガイドラインである
- 7) 教育心理学者であり名誉教授として知られる、アメリカ教育の先駆者の1人である
- 8) 各国から訪れる外国人留学生のためのインターナショナル・バディプログラムのことを指す
- 9) 英語を母語としない、第2言語としての英語のことを指す
- 10) 国際的ネットワークを広げるためのフランスにある非営利団体を指す
- 11) S1～5は学習者のことを指す
- 12) JF 日本語教育スタンダード【新版】『共通参照レベル』より抜粋
- 13) アメリカのバイリンガル教育に関する現状課題と対策方法を提起している
- 14) インプット仮説の他に、イマージョン教育や内容中心の教授法について例を挙げている
- 15) 田中博晃(2014)「特性レベルの内発的動機づけを高める授業と有能性の欲求」JALT Journal, 36.1, 91-114, 図1は114から部分抜粋
- 16) 自分には能力があることを示したい欲求。このために知識を増やそうとしたり、新しいスキルを身につけようとしたり、成長を促すための行動する
- 17) この場合、日本語を話せるという価値を取り入れて、己のものにすること